

第43回川崎市文化芸術振興会議（摘録）

- 1 会議名 川崎市文化芸術振興会議
- 2 日時 平成29年3月8日（水）午前10時～12時
- 3 場所 市民文化局会議室
- 4 出席者
 - (1) 委員 澤井委員（議長）、垣内委員（副議長）、犬飼委員、岩田委員、小泉委員、小嶋委員、関委員、高田委員、藤嶋委員
 - (2) 事務局 市民文化局市民文化振興室
中村室長、高橋担当課長、白石担当係長、渡邊主任
 - (3) 事業担当 市民文化振興室 映像のまち推進 浅沼担当課長、永塚担当係長
市民文化振興室 音楽のまち推進 佐保田担当課長、山本担当係長
- 5 議題
 - (1) 文化アセスメント事業ヒアリング 「映像のまち・かわさき」フォーラムの取組
 - (2) 文化アセスメント事業ヒアリング かわさきジャズ
 - (3) その他
- 6 公開・非公開の別 公開
- 7 傍聴者 0名

【審議内容】

事務局 委員過半数の出席により、会議が成立した旨を確認。

議題1

- (1) 文化アセスメント事業ヒアリング 「映像のまち・かわさき」フォーラムの取組
 - 澤井議長 映像制作は、新年度もいくつかやる見通しはあるのか。
 - 事業担当 これから声をかけるが、川中島小学校や京町小学校など、ずっと続けているところからは継続したいとの声を聞いている。
 - 藤嶋委員 川中島小の5年生を2回見学した。1回目と2回目では違いを感じた。1回目は、大人の監督が指示していかないと動かなかった。初めてで、ぎく

しゃくした印象を受けた。

2回目は別のクラスだったが、子どもたちが慣れていて、大人の監督が言わなくても自分たちでどんどん動いていた。時間をかければチームワークが身についていく。反省会が大事。出来上がった作品を見て、色々なシーンをつなぎ合わせて完成するんだということが初めて実感できる。子どもたちにとって大事な体験だ。

事業担当 発表会で下の学年が見ることで、自分たちもやるんだという意識が芽生える。

澤井議長 玉川中と川中島小で差をつけているのか。

事業担当 やることは同じ。指導も同じ。授業時間数や学校の教育ノウハウの蓄積、グループの大きさが異なる。技術を学ぶなら玉川中のような小さなグループが適している。

澤井議長 作った作品が YOUTUBE にでも出ると面白い。

岩田委員 小学校は長い期間、実施している。満足度も高いのに広がりがないのはなぜか。2、3校が限度なのか。

事業担当 映像制作は先生方に負荷がかかる。総合学習の時間内だけで終わらない。着手しづらい面がある。短期のお試的なカリキュラムも提案している。

高田委員 フォーラムは、幅広い事業を展開しているので、全体評価は、相当に難しい。中中両方の授業を見た。決してダメだとは言わない。協働作業で、組織の中の役割も色々ある。小学生より中学生の方がそういう点で目覚めている。小学生より中学生の方が成果や効果が得られると思われるので、中学校に重点を置いた方が良いのでは。

事業担当 中学校については、市内放送部に声掛けをして、JCOMや日本映画大学から講師派遣をしている。

澤井議長 良い取組なので、広がりがあった方が良い。

関委員 監督の指示が多かったが、中学1年から3年の協働、コミュニケーションの時間が場もって持てると良かった。お互いにアドバイスしあう場面にしてほしい。学校の都合はともかく、30人定員に対して100人の応募があったので、映像授業に対するニーズはある。他への広がりはどうなっているのか。

事業担当 校長会で説明している。紙の資料だけではわかりづらいので映像も作ったので、理解を広げたい。

小泉委員 玉川中を視察したが、土持監督は得難い方であるが、監督だけでは広がりに限界がある。ポスト土持監督になるようなNPOなどがあれば良いのだが。

事業担当 昨年から、湘南のNPOネットワークに講師を依頼している。

小泉委員 それを聞いて安心した。

澤井議長 指導体制拡充の課題はある。

高田委員 幅広いので、簡単に評価できない。新百合ヶ丘に住んでいるが、映像のまち

フェスティバルをやっていることを知らなかった。人材育成なども色々な取組をしているが、3本柱の中で、絞り込んでもいいのでは。

澤井議長 具体的には。

高田委員 3本柱と言っているが、調布のような映画のまちではない。3本柱の中でもウェイトをかけられるものがあるのでは。人材育成は、小学校～60代まで幅広いがその効果は測りがたい。決して悪いわけではないが、効果を見極めないといけない。一生懸命なのはわかるが、傍から見ているとフォーラムについてそういう印象を受けた。どこにフォーカスしているのかわからない状況について、これからの課題として、もう少しやりようがあるのでは。フェスティバルが10年目であるなら、ピッチを上げる必要がある。

事業担当 シン・ゴジラの公開に合わせ、北部では新百合ヶ丘ではイオンと連携した企画イベントを開催し、東京オリンピックの年に公開された映画を新百合ヶ丘で上映した。南部のみでなく、中部・北部にも力を入れて行きたい。

澤井議長 高田委員の意見は、スピード感を持って市民へ広げてほしいということ。

藤嶋委員 こういう事業は続けないと明らかな効果は出てこないが、学校単位で継続すれば低学年の子への刺激になる。成長して映画の方面に進みたいという子どもも出ている。種をまく気持ちで、ぶれずに継続することが大事。

高田委員 映画大もあるので、そういう視点で人材育成するのならわかる。

犬飼委員 玉川中の第1回視察に参加したが、これで一体まとまるんだろうか?と思った。しかし今日、完成した作品を見ると、子どもたちの力はすごいと思う。継続し、他の中学校にも広がってほしい。

澤井議長 1～3年生の混合クラスの仕組は良かった。

事業担当 玉川中の教育方針によるものである。

小嶋委員 映像の授業で何にフォーカスするか。高価な機材を丁寧に扱うことか。自分たちがイメージしたことを映像にすることは、今までに考えたことがないので、創造性や協働の精神、チームワークの良い勉強になる。本当によい作品を作ることも目標になる。色んなことを整理する必要がある。先生も整理できていないのでは。先生の経験に頼っているところがある。

映画でなく映像の授業であれば、スマホでもいい映像が取れる。ツールを簡単にして短くすれば、個人レベルでも映像ができる。機材が揃っていないといけないのであれば、広がりにくい。映像を作る目的によっては、限られた機材でも協働作業はできる。

澤井議長 プログラムメニューを広げてみても良い。

映像担当 継続している学校では教育的効果を把握・検証している。他の学校に広める時には、効果を伝えていければ良いと思う。各学校へ効果についてのヒアリングを行う必要があると思う。

高田委員 監督は映像を撮ることは超一流なのだと思うが教育者の立場ではない。監督は時間の制約の中でやるべきことがたくさんあり、どうしても指示を出してしまう。生徒の自主性を引き出したほうが良い。コミュニケーションにフォーカスしていれば、そうはならなかったと思う。どこにフォーカスするか明確でないのでは。

澤井議長 ご意見ということでよろしいですか。

藤嶋委員 監督に教育者としての役割を求めるのは難しいのでは。彼はプロの監督だから。映像というのは、完成物を見ないと子どもたちにはわからない。そのプロセスは大事で、それが教育だと思っているのでは。

映像担当 教育面ではクラスの教員がいる。あくまで土持監督は、知識や経験を伝えるゲストティーチャー。

高田委員 完成に至るまでの協働作業が大事。そういう視点を監督も持つべきだと思う。

垣内副議長 別の自治体の教育委員をしているので学校からの視点で述べたい。学校は色んな所からオファーがある。特に総合学習の時間では、スポーツ団体、チャリティーなど他との競合も考えなくてはいけない。サッカーも同じことを言っていた。空手などは礼節、自他教養を学べる。

川崎は音楽のまちでもあるので、担任に任せてそれぞれベストチョイスというのものもあるかもしれないが、大きな人材育成の方向性として音楽と映像のバランスをどう取っていくか。ある学校は音楽、ある学校は映像というように、ある種の役割分担があってもいいのでは。

映像自体はネットの時代なので、ネット配信は10年後には必須の能力となる。中長期的にどういう効果を与えられるか研究していく必要がある。

アトレの映像のまちフェスティバルのVR、ARは面白かったが、どう見ても販売促進コーナーのようだった。化粧水、キャンディー、光るペンライトなどを簡単なスロットマシンでもらえることができ、それなりに人は来ていたが、明らかに販売促進だった。グッズをもらった人たちに「映像のまち」が伝わったかどうか。残念な気がした。

澤井議長 個人的にフェスティバルは楽しかった。VRの工作キットを家の小学生・幼稚園生に見せたら喜んでいて、お祭り以外に、子ども向けのバーチャルリアリティのミニ講座があれば良かった。

藤嶋委員 2回目の視察で、川中島小学校で監督に授業の狙いを聞いたところ、「1回目と2回目で子どもたちが違ってくる。2回目は準備ができていて、次の行動把握し、スムーズになって進んでいく。それだけでも教育的効果がある。」と言っていた。

澤井議長 可能性のある授業といえるが、教育現場に入れるには留意点や工夫が必要という意見が多かった。

関委員 シン・ゴジラツアーに参加して非常に楽しかった。応募は1600人だった。ロケ地をサポートするNPOがあるのを初めて知った。素敵なことだ。ツアーでは普段は入れない昭和電工やLiSE（川崎生命科学・環境研究センター）にも行った。映像と産業を結び付けて川崎をアピールできていたので継続してほしい。1人担当が粘り強く企画・交渉して実現できたと聞く。これも素敵なことだ。

澤井議長 まちづくりの効果がある。

犬飼委員 2回目のバスツアーはどのくらい応募があったのか。

事業担当 2回目も定員42名には達したと聞いている。

澤井議長 次の映画に期待したい。

文化室長 シン・ゴジラは、ロケーションジャパン大賞の特別賞を受賞した。

澤井議長 シン・ゴジラのロケは、川崎でしか行われていないのか。

文化室長 大田区など撮影されたが、東京やドイツなどかなりのシーンが川崎で撮影された。

高田委員 ロケ地を売り込むということはあるのか。

事業担当 売り込みはない。売り込まなくてもロケが来る。

高田委員 売り込むわけではないとすると、たまたまシン・ゴジラの撮影が来たのか。

文化室長 そうではなく、今までの実績の中で川崎なら撮れるという評価がされた。いわば、今までの取組の集大成としてシン・ゴジラが実現し、全国的に評価された。

関委員 昭和電工に今までのロケの展示がしてあった。

犬飼委員 シン・ゴジラ以外でも川崎はロケ地として有名なので、まとめてバスツアーが組めるのでは。

文化室長 今までもやっている。今年はシン・ゴジラに特化した。

(2) 文化アセスメント事業ヒアリング かわさきジャズ

藤嶋委員 ジャズアカデミーと洗足学園のライブを視察した。どういう人が来ているかなと思ったが平日で高齢者が多かった。川崎市は音楽のまちで、クラシックからジャズに広がっている。昨日、岡本太郎美術館の施設部会があつて、美術に対する予算が先細りと聞いた。市の予算が美術に対して音楽の予算が膨らんでいて、予算のバランスが傾いている気がする。

ジャズはどこでもやっているのだから、市の企画として特徴を出すのは難しいのではないか。アカデミーでは、ジャズとアートの関わりでレコードジャケットのデザインとかを視覚的に見せてみせてもらって面白かった。

澤井議長 「橋をかける」のテーマは良かった。事業の中にもブリッジングが現れていた。佐山氏のライブを見たが、よくコラボしていた。佐山さんの魅力や説得

力もあるが、ジャズが楽しくなった。

関委員 韓国の打楽器とのコラボがすごかった。翌日佐山氏と話したが、佐山氏もそうですよねと言っていた。

3つほど言いたいことがあるが、狭いプラザソルでのビッグバンドは音が大きかった。会場はそこで適切なのかな。市民交流室は素敵だったので、中身によって会場を工夫した方が良さそう。曲がわからない。解説プログラムもない。仲間内の解説のようで改善が必要。市民とともに楽しもうという視点では工夫が必要。一番感動したのは、ルフロン前では、みんなでリズムをとっていたシーンで、とても印象的だった。市民交流室も佐山氏もよかった。川崎らしさが出ていた。

澤井議長 これだけのプログラムを企画から実施までまとめるのは大変ではないか。運営上の苦労はあるのか。

事業担当 企画運営委員の方々が持ち寄って実現した。地域連携は、それぞれの地域の取組とかわさきジャズとコラボした。

澤井議長 相当のプロデュース能力が必要。よくやっている印象を受けた。

関委員 初めて知ったが、溝のロジャズ同盟の支える力も大きい。

市民劇の「南武線誕生物語」の事業費は1200万円で、出演者はほとんどノーギャラ。3千人から3千5百人を集めて、8割から9割をチケット収入で賄う。それに比べるとジャズは補助金に頼りすぎなのでは。

事業担当 チケット収入と協賛は課題と認識している。一方、ジャズは、音楽を通じた潤いのある市民生活、地域の賑わいの創出がある。魅力的な内容でチケット販売増を目指す、売れば何でも良いというわけではない。ジャズの多様性、川崎の多様性への貢献も考えながら収入面も考えていきたい。

澤井議長 国の補助金が半分か。

事業担当 モントルーの時代から、国の補助金も右肩下がりとなっている。

高田議長 異議がある。事業収入を上げるという考え方を取らないと。この中にジャズが好きだという人がどれだけいるのか。ジャズで黒字にするのは無理、チケット販売は脇に置いて、みたいな話をすると市民は怒るのでは。

中村室長 議会ともやり取りしたが、単なる興業としてやっているわけではない。チケット販売収入を追求していくのはもちろんだが、多様性、インクルーシブなまち川崎を実現するためのまちづくりの戦略として実施している。そのためジャズという表現手法を前提にしているので、そこをずらすとダメ。企画・運営委員会などでも売れる公演だけやればいいという委員もいたが、そうではないということも市としても言い続けなくてはいけないと考えている。もちろん国の補助金で成り立っていることは認識しており、事業収入を上げることは運営面での最大の課題だと考えている。

澤井議長 オリパラ関連で文科省の補助金はないのか。

垣内副議長 文化庁の補助金は、色々レッテルを変えてやってきているが、増えていくという考え方は無理。新百合21ホールの公演を拝見した。65%は入場者率か有料入場者率か？

事業担当 入場者率で出している。

垣内副議長 お金を払っている人はもっと少ないということであれば、まだ伸びしろがある。チケットをできるだけ売って、少しでも多くの収入を上げるというやり方をして、フリーライブ、人材育成などインクルーシブな重要な部分は公的助成をするような組立をしていく必要がある。

新百合21ホールの公演の入場料は3500円。市民の税金を使って、3500円のチケットを買って楽しめる人のためになってしまうので、せめて事業費とトントンをめざす勢いでいかないと苦しいと思う。

そのためには広報が重要だが、何で知ったかというアンケート結果はバイアスがかかっているが、チラシや公式HPが多い。どれが効果的なのかコストと共に検討すると良い。オペラは、高くて効果が少ないので新聞掲載をやめた。Web系のお金の掛からない方法を。公演自体のクオリティは高かった。

関委員 客を増やすのは、興業という意味ではなく、ジャズ仲間だけを集めるのではなく、一般の人が観客になるということ。芝居では観客が舞台を作るということもある。良いお客さんを呼べば公演の質も上がる。良いアーティストを呼べば、お客が来るというのとは違う。

高田委員 アンケート項目は、演奏会があるから聴きに行くという発想になっている。そうではなく、参加しに行くイベントとして捉えてアンケートの内容を楽器の経験はあるか、ジャズは好きなのかなど、中身に入って行かないと。

ジャズに限らず音楽は何度も聞くからいい曲だと思う。初めて聞いて直ちにいい曲だと感じる事は多くはない。聞き覚えのある、あの曲をまた、繰返し聴き、評価が定まって行くのが音楽で、従って、あらかじめ、セットリストは公表すべき。そうしないとジャズの良さがわからない。知っている人だけで作るイベントではなく、市民が参加することが大事。また、そのための人材育成であるべきで、60代・70代で何が人材育成か。若い人が来て、ジャズが良いと思ってもらおう。

澤井議長 60代、70代でも人材育成であることは確か。

犬飼委員 親子向けの音遊びに参加した。今回初めての試みで、始まる前は参加者はとても期待していたようだったが、大人のしかもジャズ好きな人向けの構成になっていた。時間を短縮し、ぞうさんとかチューリップとかを大人向けにジャズにアレンジすれば、親子とも喜ぶと思う。

事業担当 アンケートや保育士との反省会でも、長かった、子ども向けの曲があれば良

かったという感想があった。30分2回にして、子どもが知っている曲も入れたい。次も続けたい。

澤井事業 音遊びに参加したお母さん方が、公演の有料チケットを買って参加してもらうと良い。あれだけで終わってしまうのはもったいない。

岩田委員 小曽根真、ビッグバンド、新百合ヶ丘の公募型フリーライブに参加した。音楽のまち川崎の認知度がダントツに高いという話があったが、芸術のまち川崎が根付くには質の高い企画は継続すべき。

補助金に頼っていて、適正な事業規模が見えづらい。決算ではアーティスト費が安い、広報宣伝費は高いので内容精査が必要。63%の入場者率をどう捉えるか。全体の箱に比べてだと思うので、適正な大きさの会場を選べば、入場者率は改善するのでは。

東京や横浜のジャズと比べて、かわさきジャズの特徴は？

中村室長 9月の東京ジャズはNHK、日経と連携し、億単位の事業規模で世界の有名アーティストを呼び、2日間大ホール中心で9000円～10000円の高いチケット料金を取っている。ペイできないので内容を変えると聞いている。

10月の横浜ジャズプロムナードは、関内ホールなどの公演もあるが、徹底した街中で出演者からお金を取って、2日間限定で関内周辺でどこでもジャズを聴ける。川崎はその間をめざす。ホール公演もフリーライブも行い、ジャズを通して川崎の南北をつなぎ全区展開している。ミューザなどの音響を活用したホールプログラムも実施した。

都市型ジャズフェスティバルで、1年目にジャパンジャズアワードを受賞した。中身は多様性、コラボレーション、インクルーシブ。川崎でしか聞けないものを洗足・昭和の先生のアイデアをいただいて、チャレンジしながら内容にこだわっている。どういったスタイルにするのかはこれから。

実行委員会の決算は、かわさきジャズ全体の数値ではない。チッタなどの連携した事業者の公演などは含まれていない。

小泉委員 ルフロン、プラザソル、昭和音大に行ったが、セミプロの演奏を奥さんと間近で聴くことができ、川崎ってすごい町だねと言っていた。1回来ると、来年はお金を払ってでも行こうかと思うので、こつこつと今の感じで継続してもらいたい。

小嶋委員 今は、何がジャズかという定義がなくなっている。今のミュージシャンと一般の人のイメージとの大きな隔りがある。最先端のクラシックとほとんど同じ。古いものと新しい挑戦とのバランスは必要。一般のお客さんに寄り添うことも必要なので、ミュージシャンにもリクエストを出していく。ジャズが盛んになるか衰退するかの岐路にあると個人的に思っている。上から目線ではなく頑張りたい。

犬飼委員 始まって 2 年目にしてはずいぶん入っている。1 回目の東京ジャズを聴きに味の素スタジアムに行った。世界から有名なアーティストが参加していたが、5 分の 1 位しか入っていなかった。それに比べて頑張っている。

澤井議長 長い目で見ていく必要がある。